

すてきな  
寄せ集め

collection,  
a nice

梅雨が終わって夏だというのに、ここ一週間というもの、天気がハッキリとしない。  
降っては止んで。また降っては止んで。  
まったく、切りがない。  
降るなら降るで、降ってくればいいのに――まるで自分の中途半端さを見ているようで腹が立つ。

決まって夏が来るとそうだ。  
何かが変わって、始まるのではないかという期待。  
でも、これまでその期待が実現した例（ためし）はない。  
実際のところ、淡い期待というより、単なる希望に過ぎないのかもしれない。

\*\*\*

時計の針が夜の9時半を指す。  
時間だ。  
いい具合に外の雨も、今は上がっているようだ。  
手際良く、準備してあったウエアに着替える。  
大切なのはここで予断を許さないことだ。  
「なぜ走るのか」  
とりあえず、理由は走りながら考えようと思う。

外に出ると雨の匂いがする。

もっとも、少し湿った空気の中を走るのは嫌いじゃないのだが。

季節に色があるように、天気には独特の匂いがあるのだ。

そしてウォークマンのスイッチを入れる。

夏が足りないから、夏らしい曲を選ぶ。

――我ながら単純だと思う。

それでも、何かを忘れられるのならば、走りながら音楽を聴くのも悪くはない。

走るコースはいつも決めていて、隣の市まで行って帰って、40分。

僕にとっては軽い気分転換に過ぎない。

そう、決して誰かと競う勝ち負けのためではなく。

ただ今日はいつもと違って、気分がいい。

降り続いた雨のおかげでベタつく風も吹いては来ない。

久しぶりに「あの道」を走ってみようかと思う。

いつもの交差点を右に曲がり、普段とは違う下り坂。

見馴れたはずの風景の中を、淡々と足を動かし続ける。

しばらくして、開けた緑地に出る。

いわゆる河川敷だ。

懐かしい。

いや、あるいは忌々（いまいま）しい。

見馴れない夜の光景が、僕にそう思わせているのだろうか。

ポツン。

どうして僕はこうもついていないのだろう。

僕の到着を待っていたかのように、大粒の雨が降り出す。

……やれやれ。

とりあえず、近くの木陰に避難しよう。

\*\*\*

雲がゆっくりゆっくりと流れていく。  
風に乗って心地よい若芝の薫りもする。  
こうして空を見上げて、一時現実から離れるのが何より嬉しい。

「クロキ君？」  
不意に名前を呼ばれたので、僕は慌てる。  
「いいの？走らなくて」  
「いいんだよ、休憩もロードワークのうちさ」  
とっさに口をついたのは、残念ながらまともな言い訳ではならなかった。  
起き上って声の方を振り返ってみると、知らない女の子がこちらを見つめている。

「なんで名前を知ってるんだ？って顔ね」  
僕の寝ぼけた口が回る前に、彼女が続ける。  
「だって、そこに書いてあるもの」  
ユニホームの胸のところを指して、少しいたずらっぽく彼女が笑う。  
確かに、そこに大きく「黒木」と書かれていた。  
次第に彼女の顔がはっきりとしてくる。  
歳は僕と同じくらいだろう。  
ただ、制服からしてうちの高校の生徒ではない。  
素朴な、でも笑顔がとても素敵な子だった。

「野球、しないの？」  
不思議そうに彼女が尋ねる。  
どうやら、いつも僕がここを走っているのをよく見かけていたらしい。  
「走るのも野球のうちさ。第一、グラウンドにいたってつまらないしね」  
「ふーん」  
彼女にはあまり納得のいかない答えだったらしい。  
まあ、しょうがない。  
言ってる自分が納得していないのだから。

会話が途切れると、また静かな時が流れる。  
遠くの方では水遊びをする子供たちの声がする。  
「野球、嫌いなの？」

「いや、嫌いじゃない」

どういう顔をすれば良いのか分からず、僕はもう一度寝そべって空を見上げる。

「だけど、投げれない。だから、ずっと走ってるんだ」

「ヘンなの。好きなら投げれば良いのよ。嫌いなら投げなければいい。ただそれだけのことじゃない」

投げたければ投げればいい……か。

僕が部活を辞めたのは、これから数日後のことだ。

\*\*\*

冷たい風が頬（ほお）をなでる。

僕はどれくらい瞑想に耽（ふけ）っていたのだろう。

ウォークマンから聞こえる音楽には、既に夏らしさが失われている。

彼女とはあれ以来、会っていない。

拒む理由はまったくなかったけれど、会う必要もなかったし、会うべきでもなかったのだと思う。

投げればいいのよ——か。

雨は少し落ち着いた。

どのみち濡れずには帰れないだろう。

それならば、もう一か所寄っておきたい所がある。

僕は再び走り出した。

\*\*\*

よっ。

久々にしてはあまり変わってないなと思う。

卒業以来戻って来ることなかったし、戻って来たいとも思わなかった。

相変わらずここは監視カメラの死角のようだった。

いいのかこれで――というのは、裏門を乗り越えてる人間が思うことじゃないのかもしれない。

ふと部活の遠征帰りに忍び込んだのが懐かしく思えた。

朝練の時もここから入ったっけ……。

不思議なもので、当時辛かった思い出の方が今では鮮明に懐かしい。

昨日一昨日と雨、予報では明日も雨。

そうとなれば、あれは階段の下にあるだろう。

雨漏りする倉庫よりも階段の下の方が安全とは情けない。

もっとも、昔のままならば、という話ではあるが。

探してみるもんだな。

欲しいものは見つかった。

何個も要らない。

一球でいいんだ。

それを強く手に握りしめたまま、マウンドへと向かう。

今も昔も、身体はどこも悪くはない。

――第一、本当の理由はケガなんかじゃなかったんだ。

今になってこのマウンドに立ってみると、あの時の自分が何だか滑稽に思えてくる。

高校生にもなって、これっぽちの距離さえ届かなかったのか。

たかが18.44m（メートル）。

されど18.44m（メートル）。

――まあ強いて言えば、問題があったのは身体ではなく心の方だった。

投げればいいじゃない――か。

雨は依然降り続けている。

それでもいつかは止むだろう。

そして太陽を見て思うんだ。

ああ、なんて清々（すがすが）しいんだ、って。

そう思えるためなら雨の日だって悪くはない。

左足をゆっくりと後ろへ。

迷いが無い僕のフォームは、淀（よど）みなく流れていくだろう。

「エース」と呼ばれたいつかの自分はもうここにはいない。

それでもいいんだ。

今の自分がここにいる。

そう、投げたいから僕は、投げるのだ。



「そうだ。京都、行こう」なんて書き始めると、どこかの鉄道会社のCMみたいだ。  
だがあいにく、今回は夜行バスでの一人旅である。

「自分を探しに」とか、「寺巡りをしよう」とか言うならば、なにもこの時期に行くこともない  
だろう。

第一、今は小雪も舞い散る冬で、来週には大学のテストだって控えている。

親に話せば「友達に会いに行くためにそこまでする必要はあるのか」と、当然の如く横やりを入  
れられたことだろう。

だから「友達と飲みに行く」としか言ってない。

まあしょうがない。僕はどうしても行きたいのだ。

行ったら行く——誰が何と言おうと。

\*\*\*

「ヨシダくーん、2月の終りの方ってヒマ？」

はい？——あまりに急で返事に困ってしまった。だってまだ10月じゃないか。

それでも教室から出てきた彼女は、悪びる様子なしに話を続ける。

「演奏会」

あー、はいはいはい。それか！

彼女は部活でヴァイオリンを弾いていて、例年春には定期演奏会が企画されているのだ。

「うーん……分かんないな。行けると思うけど」

決して音楽に明るいわけではないのだが、意外と僕は、この手の演奏会が好きだ。頑張ってる人  
を観ると元気になる。

「ありがとう。楽しみにしてるから」

彼女はそう言い残すとそさくさと行ってしまった。

\*\*\*

「なんで来てくれたん？」

帰りのバスにてメールをやりとり。結局、現地で彼女と顔を合わせることはなかった。

「ま、他にも用事があったからね。ついでだよ、ついで」

メールの文面を考えつつも、まったく、自分というやつはホント素直じゃないと思う。

楽しみにしてるから――まあ、3年も前の「約束」を果たしになんて、そんなことを言う勇氣、僕にはなかったけれど。

たとえ社交辞令であっても、女の子に誘ってもらったら嬉しい。それが男子というものなのだ。送信……っと。

かつてゲーテは「人が旅するのは到着するためでなく、旅をするためである」と言った。

0泊3日は正直シンドかったけど、僕は、今しか感じられないことを一人旅で味わえたことが幸せだったと思ってる。

彼女は喜んでくれただろうか。

……いや、自分が満足できたのだから、それで十分、だよな。

窓から見える夜景も、「不安」だった行きとは違って、愛おしくさえ感じる。

一人の夜も悪くはない――か。やがて僕は暖かな眠りに包まれた。

「ありがとう」

その彼女からのメールに気がついたのは、東京に帰って来てからのことだった。

雲が遠くを流れて行く。

ゆっくりと。

ただゆっくりと。

秋の空は夏の空に比べ穏やかだ。

暖かい午後の教室で眠くなるなど言う方がおかしい。

ましてや今日は金曜。ロクなことがなかった一週間は、振り返るだけで疲れる。

そういえば、昔にもこんな風に空を見上げたことがあったっけ――。

やはりそれは午後の教室で、僕は窓の外を見つめていた。

オレンジ色の記憶。だから、半分寝ぼけていたのかもしれない。

あれは高校時代だろうか。

いや、違う。あの頃の僕は、部活の昼練のおかげで午後の授業で何かを考える余裕なんてなかったはずだ。

じゃあ、中学生の時か。

いや、それも違う。あの時はまだ、曲がりなりにも僕は優等生と呼ばれていたのだ。授業中に窓の外など見上げるものか。

となれば、あれは小学生の時――。

うん、確かにそうだ。

あの時僕は思ったんだ。「ダイガク生になった自分って、どんな自分なんだろう。」

友達からチュウガクセイというものの存在を知らされ、漠然と思い描いた将来。

――もっとも、描き切ることなど、当時の僕にできはしなかったが。

だが、そのダイガク生となった今でさえ、僕は自身をハッキリと定義できずにいる。

「ううん、頭が良いってよりも、優しいんだよ。」  
それを聞いて嬉しい反面、幼心に何か複雑な気持ちになったのを覚えている。

強くなければ愛せない。優しくなければ愛する資格がない――。  
どっかの刑事が、小説でそんなことを言ってたっけ。

僕はダメだな。だって強くない。まあ「優しい」と言われるだけマシなのかもしれないが。  
でも一体、あれは誰が言った言葉だったんだろう。  
小学生の時。  
記憶に引っ掛かりはあるんだけど……うまく思い出せない。

ここを訳してくれるかな。  
その言葉で、僕は現実に戻された。

Einsam aber Frei.  
Frei aber Einsam.

孤独、だけれど自由だ。  
自由、でも孤独だ。

結局、自由を手に入れて孤独になったのか。  
声に出して読み上げてみると、まるで僕みたいだな――と内心苦笑いだ。  
どうしてドイツ語の時間に内省までしなければならないんだ、まったく。  
視線を再び窓の外へと戻す。  
差込む気だるい陽光は、夏との別れを告げているみたいだ。

誰にでも優しくいること、それはとても素敵なことだわ――。

彼女はグラスにそっと手をかける。

でもね、その優しさがあなたにとって、命取りにもなるのよ。

優しさというのは、時に残酷なものでもあるの。

――別れたことが寂しかったんじゃない。

最後の最後に素直になれなかったことが悔しかったんだと思う。

欲しいのなら、欲しいのだと。

僕は彼女の扉を開けた。

それと同時に、開いた僕の扉も、夏に閉め忘れたままだ。

だからいつも春の終わりには、決まって体調が悪くなる。

まるで、自分が自分を欠いているかのように。

そして、気づくとそこにはもう秋がいるのだ。

彼女が残していったタバコの吸い殻を見つめながら。僕は思う。

彼女は気づいてなかったかもしれないけど、たぶん、僕らは似てたんだ。

寂しくて。

そして、それから全てが始まったんだ。

だけど.....僕らはあの時、ああすべきじゃなかったのかもしれない。

後悔なんて後ですればいい。そう思ったた。

だけど、後で後悔するってのも結構シンドイ。

今考えてみれば。何か自分に足りないものを求めて僕らは、一つになったつもりだったのに。

結局、僕らはそこで何かを損ない始めたんだ。

今の僕が失ってしまった何かを。

――大切なモノなんて、失ってから気づくものなのよ。みんな、ね。

今度はまたあの子の声だ。

結局僕は誰も救うことができなかった。

誰も、僕自身もみんな。

(1)

---

旅は旅すること自体に意味があるのだ――ゲーテ。

一人になったら小説でも書こう。

その位、悠々自適な合宿生活を思い描いていたのに。

2日目にして、早速つまづく。

と、いうか捕まる。

部屋を訪ねて来たのは、寄宿舍が一緒のホームシックな高校生クン。

教官との相性も悪ければ、コッチで知り合った仲間とも馬が合わないのだとか。

.....それはかわいそうに。

などと同情したが最後。

切々と始めました「相談」。

どうして彼女はブログを消さないのか？

.....知るか、そんなもん。

彼女に聞いてくれよ、彼女に。

どうやら、彼女が自身の過去を赤裸々に語っているらしい。

しかも、おおっぴらに。

今は一途になって、自分から男友達のアドレスも消してくれて.....。

って、おい。

消せば、全てリセットされるわけじゃないだろう。

結局、ブログだろうが、現在進行形の付き合いだろうが、知ってしまったこと、経験してしまったことは、向き合うか、忘れるか.....。

一人「嫌だ」と嘆き苦しんでも、それ自体はなくなりはないんだから。

——とりあえず、寂しいのなら電話して声でも聞かせてもらえれば？

お引き取り頂くがため、苦し紛れの提案をするも、シャイな彼女によって却下。

メールはスムーズなのにね、どこか雪で封鎖でもされているのかしら。

「あのときは良かった」とか「昨日は彼と.....」とか。

見なくて良いものを見ちゃったんだなとは思うけど、見ちゃったものはしかたないじゃない。

それでも好きなら、これから彼女とどう向き合うかを考えた方がよっぽど建設的だと思うのだけれども。

.....何で消さないんですかね？

それはね、消したくないからだよ、君。

一度、言葉にして発してしまえば、胸の奥に抱え込む必要がなくなるでしょう？

第一、そーゆーことを趣味で残す人がいますかい。

それを「嫌だ」で責めては、かわいそうだよ、彼女が。

分かってあげる努力も、包み込む度量も、君次第だけれども。

「あの時」の悔しさややるせなさ、そして自分への戒めが、今彼女にそうさせているんだよ。

.....きっと。

なーんてね。

彼は、その不良な体調で語り続け、挙句の果てに一端の「寂寥感」を置いて行かれました。

.....また、来ます。

いいえ、結構です。

なーんてね。

この寒い時期に山形は米沢。

意外と時間はありませんが、雪だけはあります。

ものすごく、大量に。

疲れてる時は寝るのが一番だよ。

と、送り出して、早く寝てしまいたい自分だけが取り残されております。



(2)

---

みなさんは正しい階段の登り方、知っていますか。

まずは背筋を伸ばして。

一段飛ばしでしっかりと踏み込んで行きます。

その時に気をつけなければいけないのが、踵（かかと）まで確実に踏むこと。

現代人に多いのが、つま先だけで階段を上がっていく仕草。

美しい歩き方を手に入れるには、バランスの良い脚の筋肉が必要なのです。

.....なに言ってんだろ。

結局、こちらに来て外を走ろうにも、雪が邪魔で走れないことが判明した（もちろん初日からネ）。

第一、歩道はおろか、車道さえ定かでないのに如何（いかん）せん。

もっとも、こちらのご老人は元気でこんな雪でも、車道を自転車で走ってるとかいけないとか。

頼みますので路上教習の時だけは、勘弁して下さい。切実に。

そんなこんなで、外を出歩いてもコケるだけで何ら運動にならないので、仮住まいの6Fへは階段を使うことを決意。

荷物さえなければ息切れしない（当たり前か）。

主に下に降りるのは食事に行く時だけど、とりあえず食事付きプランにしておいて良かったと思う。

自炊の出来不出来や、予算云々（うんぬん）ではなく、栄養バランスを考えたら、最善の選択だったと思う。

まあ、欲を言えば。

自炊組ではなくとも、レンジ位備え付けておいて欲しかったなと思う。

小さな冷蔵庫はガマンするけれども。

年末年始、返金されても困ります。

ガスコンロとヤカンだけで何せいゆーの（蕎麦（そば）が茹でられないじゃない）！

(3)

---

Practice makes perfect――

確かにこれはステキな言葉だと思う。

練習は本番の様に。本番は練習の様に――

じゃあ、練習はいつするの？

なんて言ったら、ただの揚げ足取りみたいだけど。

野球を通じて学んだ、自分なりのモットーである。

だけれども、プレッシャーに弱い自分にはこれが一番合っていると思う。

練習では一番自分がヘタだと思って。本番では自分が一番上手いと思って――

全国大会のベンチ入りの選考会で、打席を待つ足が震えてしょうがなかった時に、手のマメを見つめたら不思議と震えが止まったのを覚えてる

(そして実際、その直後に打って選ばれた)。

Trial and error makes better――

僕のスタイルはこれでいい。

「免許をとろう」のCMの、あまりのタイミングの良さに吹いたけど。

いきなり免許じゃダメなんだ、ドラえもん。

だから、とりあえず出して、仮免許。

(4)

---

溜っていたものは出したら流す。

.....いきなり何を言い出すのかと。

我が『仮暮らしのトイレッティ』は、3秒ぐらいガマンして捻（ひね）っておかないと、十分に流れない。

この「3秒ぐらい」というのがミソで、ちょうどマニュアル車の発進時の半クラッチと同じくらいの時間である。

おかげで、あれだけエンストに苦しんでいた発進がスムーズになった

（さすがに教官には「水洗トイレのおかげで.....」とは言えないけれども）。

そんなことはさておき。

これだけ吐き出し続けているのは、一重（ひとえ）にヒマが.....

もとい、年内の教習が無事終了し一息つけたからである。

「野球ノート」ならぬ「教習ノート」を作ったり、手帳でコースの復習をしていたら、食べて寝て、あとはそんなものである

（嗚呼、レポート）。

こちらに来て変わったのは、大学生らしからぬ早寝早起きと、毎日のお風呂だ。

まるでおっさんみたいな愉しみだけど、教習中、トイレが近くなるのが嫌で中毒気味のコーヒーも控えてる

（持参したマイ・タンブラーも送り返した）。

金田一の剣持のおっさんみたいに「俺の血の半分はコーヒー」と豪語するハズが、「毎日の愉しみはお風呂♪」と、まるでしずかちゃん状態である。

この僕が、温泉の素（←死語）を求めて、ホーム・センターを訪ねるなど、誰が想像したであろうか。

と、言うか自分が一番ビックリしている。

いや、さらに驚きだったのは防水スプレーの威力である。

東京にいるときはさしてありがたみを感じたことはなかったが（ごめんなさい）、溶けた雪の中を歩く、あるいは、まとわり付いた雪が溶けた時の悲惨さを考えれば、予備に成り下がったランニング・シューズが予備のままでいることは、まさに奇跡としか言いようがない。

そして、ありがたさついでにユニクロの製品。

それこそ、他の製品はパンツと靴下くらいで、あとは全部ユニクロという位の徹底ぶりだけでも。

温かく、洗濯にも乾燥にも強い。

持ち込める荷物も限界があり、、また毎日洗濯とはいかない中、これだけシンプルで使い勝手のよい衣料品は、ほとんどカミである。

いや、素材は布である。

.....いやいや、本当に、ユニクロさままであります。

(5)

---

今まで危ない場面はあっても、危ない思いをしてないから、少しばかりの自信がついてきているのだと思う。

今はまだエンストしても「哀しい気持ち」になるだけで収集しているが、実路の凍結した交差点の中で、スリップするような状況であったとしたら.....。

優良ドライバーは、常に最悪の状態を想定して、いかに安全に、かつ円滑な運転をするのかを考えているらしい。

そう、大切なのは「事故りたくない」と嘆くことではなく、「どうしたら事故の可能性を減らすことができるか」を常々考えることが良き運転の心掛けなのである。

.....なんて。

明日の餅つきを前に、尻もちをついて考えさせられた。

こっちに来て2回目。

しかも部屋の中で転ぶとは思わんだ。

さて、いろいろあったこの一年ももうすぐ終わります。

浮足立って帰省する合宿生たちをしり目に、これだけ落ち着いている自分、さすがだなと思う。

今も片手には緑のたぬき（年越しのためだけに鍋とお椀を買い揃えるのもバカらしくて、数年ぶりのカップ麺）。

なぜ東北を選んだのか。

寒い冬に、雪とやるせなさだけが降り積もる、かつて「裏日本」とまで蔑されたこの地域へ。

それは、きっと僕の血の半分が東北の血だから。

震災直後から気にはかけていたのだけれど、タダ何となく赴くわけにはいなくて

(と、言っても僕一人の果たす経済効果なんてたかが知れてるが)。

教習生の中に高校生が多くて驚いた。

けど、《現実》をまざまざと見せられた気分。

——この春から就職です。

当たり前のように高校に進学して、ぬくぬくと春を過ごし、気がつけば大学にいる。

僕に至っては少なくともアト2年間は学生だ。

それがどれだけ、恵まれた環境にあって、幸せなことか！

別に、比べて誰かが可哀そうというのではない。

だって、幸せかどうか決めるのは自分自身だもの。

それでも、その幸せへの選択の機会に恵まれていることには、感謝を忘れてはならないと思う。

少なくとも僕はそうでありたい。

「人の分まで」なんてそんなエラそうなことは言えない。

だけど、だからこそ、自分にできる精一杯のことをしようと心に決めた3・11。

出番が来た時に、いつでも行ける、準備だけは怠らない。

最期に「よかった」と思えたら最高の人生だよ——

そんな師の言葉を借りれば、「よかった」と思えれば今年は良かったと言えるのだと思う。

そして、「来年も頑張ろう」と思えれば、なお良い。

年が明ければ、大学生活4年間の総括が待ち受けている。

はたして僕は、そこで「よかった」と思えるだろうか。

うーむ。

雪と時間だけはたっぷりあります。

そのために僕は、この地に呼ばれたのだと思います。

みなさんも、どうぞ良いお年をお迎えください。

2011. 12. 31.



(6)

---

「4階建ての建物」と、かけまして

「確認を怠らない姿勢」と、解きます。

その心は……

どちらも「ゴカイ」がないでしょう。

……な一んてね。

ちなみに、僕は6階で仮暮らしをしておりますので、ちゃんと5階もあります。

に、しても。

階段の上り下りだけでは、運動量に限界があるよな……

と、思う今日この頃

(なら、この文章を書く間に腹筋なり腕立てなりすればいいのに)。

紅白のない年末を過ごし、カップそばで年を越した。

どうも、明けましておめでとうございま……した。

元旦にはモチつきをし(てもらったモチを食し)、数年ぶりに初詣に行つて参りました。

上杉神社で昨年より2,000人程増えた参詣者の内1人が、僕です。

ニュースでも話題にあがっていた「合格祈願を願う若者でしょうか、おみくじも引き……」

まさに、僕です。

末吉と小吉、どちらが運がいいのかは、いさ知らず。

全部で15近くある細目が、全4項目にコンパクトに集約してコメントされていたのは、「愛」の

証でしょうか。

「新しいことを始めても間に合いません」とか書かれていて、正直、凹んだけれども、その後の「頑張った成果は出ます」の文言を信じて、祈ったのは卒業試験の合格。

1月3日までの、いわゆる「三が日」は、珍しく晴れでした。

雪のせいでいろいろなものが見えていなかった中で教習が進み、溶けて見えるようになった後に受ける修了検定。

――なぜ、できない？

と、言われても。

やったこともないことを、その場で求めるのは不合理というものでしょう。

一回ミスしたことを、繰り返さないことが強いチームで生き残っていく秘訣ではあるけれども。

8日間の研修中に9人の教官とドライブするというプレッシャー。

と、言うか「何を知らないのか」さえハッキリしない一貫性のなさ。

威張れるのは「無知の知」……くらい。

最後に頼りになったのは、自分で作ったノート一冊。

完璧な走行ではなかったとは思いますが、自分にできるベストに近い走りだったと思います。

ドラえもん、仮免許とれたよ！！

(7)

---

あいかわらず、こちらは雪が降ったり止んだりの天気である。

でも、もう慣れた。

東京での雨は、あんなに憂鬱（ゆううつ）だったのに。

やっぱり、自分の半分には東北の血が流れているんだな、と実感する。

だから言っておきますけれど、僕は「九州男児」と呼ばれる遺伝的要因はありません。

生まれも育ちも、東京。

煩惱（ぼんのう）の数は「しゃくはち」。

ただ、方言は一つも覚えな一方、アクセントばかりネイティブに近づいていく自分には、やや複雑な心境である。

真似（まね）てしゃべらない方が、自然という事態。

さて、路上教習も進み、ようやく「終わり」が見えてきた。

20歳を過ぎると月日が流れるのは早い、とはよく言ったもので、つい最近まで“永遠の二十歳（はたち）”を謳（うた）っていたのに。

それ以後、自身の年齢のカウントさえあやしくなっている今日この頃。

「これが“オトナ時間”サ」なんて、実際、年末の方が忙しくて時間に追われているような気がしてた。

.....のに。

早いじゃん！

やっぱり1月は「行く」。

もっとも、一説によれば、早く過ぎてしまった時間も、後で振り返った時に「ああ、いろんなことがあったんだな」と思えば、それはそれで充実していた証拠だとか。

ふむふむ。

どちらにせよ、帰る日は決めてあって、あとは予定通りに卒業できるかどうかの問題なんだけど。

結局、どう頑張ってみたところで、自分には完璧な運転なんてできないと思う。

でも、自分にできる100点満点の走りを。

ところで、こちらにきて気がついたのは、低脂肪乳＝ミルクの甘さ。

周囲の人々が嫌いで今まで飲む機会が少なかったのですが、うまいです

（しかも東北限定Ver.）。

そして、生まれて初めてスキンケア・クリームを欲し、手放せなくなった毎日。

雪にも負けず、カゼにも負けず。

どの路（みち）帰らなければならないのなら、負けずに帰ろうと思う。

これでよかったんだと思う。

自分で用意した時間は18日間。

一日も削られず、一日も延ばせず。

ただただ、人の暖かさに触れた2週間半。

そして、父親が東京の空気に合わなかった理由も……何となく。

だからと言って、全てを正当化するつもりはないけれど。

……そのくらい、東北の気候に馴染んでいた自分がいた。

それにしても、滑稽（こっけい）だよな、「頑張ろう日本」って。

「頑張ろう東北」さえ、あんまり見かけなかったしさ、実際。

そこには、人がいて。

毎日を懸命に生きている。

そう、とりとめもなく降り続く雪も、生活の一部であって。

たかが、客人として招かれた身分だけども。

彼らには、彼らの日常があるのだ。

それをあたかも、停滞する日本の具体例のように「頑張れ」と。

……君たち、寝言（ねごと）は寝て言いたまえよ。

ホントに頑張らなくちゃいけないのは、僕ら一人一人なのにね。

僕らはいつまで「何となく“誰か”が」で誤魔化（ごまか）し続けていくのだろう。

これは、一人の青年の、免許をめぐる冒険であり、また、自身のルーツを感じるための旅であり、そして.....卒業旅行であった。

おそらく一生分の雪道を走り切り。

感謝の想いを胸に。

一入（ひとしお）の感慨に浸りながら。

.....また明日から、頑張ろう。

そう思えたなら。

その旅は、実りの大きいものであったと言えるのだろう。

米沢に、愛を込めて。

## キイロい自転車について

---

好きな色はキイロ——僕が小さい頃、身の回りは黄色い物であふれていた。洋服も、帽子も、そして自転車も。

そしてあの頃の僕は電車も好きだった。祖母の家が電車で三〇分とかからないところにあったこともあって、特に慣れ親しんでいたのが西武線。そう、その当時の西武線のカラーが黄色であった。

小学校に上がってしばらくすると、いつのまにか黄色い自転車は、没個性的なアルミ色の自転車に取って代わられていた。もしかすると、黄色をとりたてて意識しなくなったのもこの頃からかもしれない。たしかに「好きな電車が黄色だから」という理由は気恥ずかしい。

\*\*\*

先日、久しぶりに祖母を訪ねた。学生になってからは久しぶりだ。好きだった西武線も、今では白かったり、シルバーに青いラインをあしらっていたりと、ずいぶんと変わってしまったものだなと思う。

お茶の席での話題は、祖父の話だった。僕が三歳になる頃には亡くなっていた祖父については、あまりはっきりとした記憶はない。晩年入院生活を送っていた祖父を見舞いに行く時に乗った電車のことは鮮明に覚えていたりするのだけれど、顔だって写真で補わなければ認知することさえできなかつただろう。

最期の誕生日プレゼント覚えてる？——その祖母の問いに、もちろん僕は答えることはできなかった。

「自転車よ、黄色いやつ。ほら、小さい頃好きで乗り回してたじゃない。あれよ、あれ」  
意外な`答え、に、僕はポカンと口をあけたままだった。

「もう悟ってたのでしょうね。次の誕生日に自分はいられないって。カタログ取り寄せて、これを注文してくれ！って。それがお葬式の翌日に届いたもんだから、驚いちゃったけど」

\*\*\*

黄色い自転車——あれはおじいちゃんの形見だったのか。帰りの電車の中で思い返す。

やれやれ、僕はとんでもない勘違いをしていたようである。

電車が好きだったことも否定しないが、結局それも、おじいちゃんのかくれた自転車と同じ色だったから。

以来、僕はラッキー・カラーには黄色をあげている。

そう、あの自転車のキイロである。



## 美術館へ行こう

---

美術館めぐりが好きだ。とか言うと、何だかインテリ気取りで嫌味なヤツだと思われるかもしれない。

もっとも、僕の場合は「ふむふむ、これは誰だれの作品だね」とか、「何世紀頃のナントカ風の味がある」とか、そういった高尚な見方をしているのではなく（そもそもそれだけの知識は皆無である）、ただ美術館の中をぶらぶらするのが好きなだけなのだけれど。

\*\*\*

僕が初めて自分のお金で美術館へ足を運んだのは、高校1年の夏だった。

実技科目の夏休みの宿題。そいつをマジメに取り組む男子なんて、イマドキ流行らないのかもしれない。

それでも当時運動部に入っていた僕にとって、すこし現実から離れてみて時間をゆっくりと流すことはとても大切な行為だった。

授業中に白目をむいて先生に心配されたり、気がつけば授業が終わっていたり——ザッと思い出してみただけでも、美術の時間にやらかしたことは多い。

それでも、不思議と授業をサボろうという気にはならなかった。……なんでだろう。

部活を辞めようかと悩んでいた時の自画像。部活を辞めた後に取り組んだ自由製作の抽象画。「巧さ」とか、「美しさ」とか、そういった類のものはひいき目にもあるとはいえない代物だったけれど。つまるところ、一人、カンバスに向かって絵を描く作業は、僕にとって精一杯自分と向き合う時間をつくって、その時間を過ごすことだったのだと思う。

最終学年に進級する春休み。たまりにたまった作品を引き取りに美術室に向かった（授業の作品は基本的に出しっぱなしだった）。

そこで先生に言われたのが「よく頑張ったな」の一言だった。

運動部で精一杯だった時期も。辞めようかと悩んでいた時期も——ぜんぶ、先生には分かっていたのだ。

\*\*\*

あれから僕は一枚も絵を描いていない。

だけど、ときに時間をゆっくりと流したくなって美術館に足を運ぶ。

よく頑張ったな——その言葉を思い出すだけで、どれだけ僕は救われてきたことだろう。

## ぶどうパンの幸せについて

---

僕が小さかったころ、祖母の家に遊びに行っては、よく近所のパン屋に足を運んだものだった。今でこそ「パン=コンビニで」という図式がわが家でも受容されつつある感があるが、当時の僕の感覚では、あくまでパンはパン屋で買うからこそパンであった。そして何より――いや、これこそがこだわりの理由だったのかもしれないが――店のおばさんがくれるオマケが嬉しかった。

これ、良かったら持ってって。あの日は……そう、たしか小さなぶどうパンだった。いつもごちそうになる礼を言ったあとで、ふと、本当にいいんですか？と聞いてみたのだった。

「いいのよ。あなたに食べてもらった方がそのぶどうパンも幸せだから」

ぶどうパンも幸せだから――心の中できり返してみる。ブドウパンノシアワセ。

後々判明することではあるのだが、要するに、あの時おばさんは売り物にはできないであろうパンを僕にオマケしてくれていたのだ（もちろん、それだってありがたいことなのだけれど）。でも、たしかに、少々見てくれが悪くたってパンはパンだし、それだけの理由で本来のお役目を果たせないというのはなんとも不憫なことではないか。

そもそもあのぶどうパンだって、もともとは一本の麦。幾多の可能性が淘汰され、もっとも過酷な小麦にすりこがれるという人生を――望んでそうしたかは分からないけれど――歩んで、涙と汗でようやくまた一つになれたねと言ったのはつかの間、こねくりまわされ、あげくの果てに焼かれるんだものね。あんな熱いオーブンの中で。

なんだがこんな事を考えていると無性にパンが食べたくなくなる。それもコンビニのパンじゃだめだ。パン屋でクリーム色のトレイにならべられたパン。ちょっとくらいの不出来になら寛容でいられるだろう。いや、むしろ今の僕はそういうものを求めているように思える。

やれやれ。これじゃまるで共食いだな。通算数十枚目になる履歴書の筆を止め、僕は玄関へと向かう。それでも、久々にまた頑張ったぶどうパンの幸せに貢献できそうな気がして、気分は悪くなかった。

## 「国境の南、太陽の西。その先にあるもの」

---

僕が大学に入って初めて手に取った本が村上春樹の『風の歌を聴け』（講談社文庫、2004）だった。同書の主人公である“僕”は「鼠の小説には優れた点が二つある。まずセックス・シーンの無いことと、それから一人も人が死なないことだ（p.26）」と語っている一方で、「放っておいても人は死ぬし、女と寝る。そういうものだ（同）」と冷めた認識持っていることがとても新鮮だったのを覚えている（もっとも、僕はそれ以後、大学生活の4年間という長きにわたり、彼の描く「そういうもの」にのめり込んでいったわけなのである）。

さて、話を本題に移そう。今回僕が取り上げるのは『国境の南、太陽の西』（講談社、1992）という作品である。彼の言葉を借りれば、この作品は戦艦でもなければ駆逐艦でもなく、巡洋艦的な「中編小説、あるいは短めの長編小説」にあたる（『村上春樹全作品1990～2000② 国境の南、太陽の西／スプートニクの恋人』（講談社、2003）p.479）。全体の構成としては、主人公である“僕”（本書では、「始（ハジメ）」）が、いなくなった女の子（小学生時代の友人である島本さん）を探しに行くという、至って村上春樹らしい作品である。

現在では家庭を持つまでになったハジメ君と、不意に再会することとなった島本さんとの二人の関係を軸に話は展開されていく。これは後で知った事実なのだが、この作品の第一章は当初、そのまま『ねじまき鳥クロニクル』（新潮文庫、1997）の第一章となるはずだったそう（前出『村上春樹全作品』p.485）。しかし、クロニクルの主人公・岡田トオルが他人の《過去性》の中に引きずり込まれていくのに対し、本作の主人公・ハジメ君は、自分にとっての《過去》に共鳴しながら生きているのが対照的である。「一人っ子は生まれながらにして病にかかっている」のだという、ある種の負い目を感じながら生きてきたハジメ君にとって、「何かを捨て何かを選びとる」という結論を出すことはとても難しいことであつたし、物語序盤において当時付き合っていた彼女（イズミ）と自分自身さえをも深く傷つけ、損なってしまったこは、その帰結であつたとも言えるだろう。

彼自身が言うように、僕は「この作品がいちばん個人的に好き」だという読者の一人であるが、一方で「私にはこの作品は（まったく）合わない」という読者がいることも事実である（前出『村上春樹全作品』p.489）。それは多分に、『ノルウェイの森』（(上・下) 講談社文庫、2004）やクロニクルといった、ある意味普遍的なテーマを扱い代表作とされる作品の間であって、この作品が非常にパーソナルなものであることが原因なのだろう。だからこそ、僕は決して、この本を万人には薦めない（もちろん、「一人っ子」にはぜひ読んでほしいと思っはいるけれど）。そう、「完璧な文章などといったものは存在しない」（『風の歌を聴け』p.7）と教えてくれたのは、他でもない村上春樹彼自身なのである。